

せんりょうかにほんごきょういく

占領下日本語教育はフィリピンでいかに

きおく

記憶されたか

ふつうきょういく にちべいていこくかんかんけい
——普通教育をめぐる日米帝国間関係

きのしたあきら
木下 昭

はじめに

あじあたいへいようせんそうちゅう にっぽん おも げんざいとうなんあじあ よ ちいき せいりよくけん
アジア太平洋戦争 中、日本は主に現在 東 南アジアと呼ばれる地域に勢力圏を
ひろ 拡げた。これによって多くの地域で、後発の帝国であった日本が、欧米諸国にとって
かわって統治権を得ることになった。したがって、この支配の交代によって生じた変化
を被支配者がどのように受け止めたか、そのなかで新旧帝国間にいかなる関係が
みだ 見出せるか、これらを論じることは日本帝国に対する考察を深める上で極めて重要
である。

ていこくしはい いこう ともな にっぽん せんりょうか ちから そそ にほんご ちゅうしん
この帝国支配の移行に伴って、日本が占領下で力を注いだのが日本語を中心と
する教育である。なぜなら、教育により社会の根幹である言語や思想を統制する
ことは植民地支配の王道であり、しかもかつての支配者の影を解消することに
つながるからである。したがって、この教育に焦点を当てることは先の問いの核心を
突くものになる。この観点で貴重な事例となるのが、フィリピンである。というのも、他
の大部分の地域で西欧諸国は、一般的・基礎的な知識・教養を施すことを目的
とする普通教育を被支配者に実施せず、コラボレータとなる特権階級に宗主国の
げんごきょういく げんてい おお きょういくにかん にっぽん
言語教育を限定することが多かったからである。したがって、教育に関する日本と
おうべいていこく かんけい あつか けんきゅう ひかくてきちい きょういくきかん たと
欧米帝国との関係を扱った研究としては、これまで比較的小さな教育機関、例え
ば日本統治下のキリスト教系私立校や高等教育機関の卒業生を対する。

The Memory of Japanese Language Education in the Philippines: A Study of Imperial Influences

象としてきた。しかし、普通教育のもつ重み、すなわち帝国側が注力した人的物的費用の大きさや言語能力などの被支配者への広範囲に及ぶ影響に鑑みると、この教育を要に帝国、そして帝国間関係を論じる意義は高い。そこで、フィリピンが注目されるのである。

フィリピンは、全土で普通教育が複数の帝国によって施されたアジアでは希有な地域である。アメリカは、アメリカ・スペイン戦争後の一八九八年にスペインからフィリピンの統治権を得た後、文明化、すなわちアメリカ化を推し進めるためアメリカ本土から教員を送り込み普通教育を導入した。この結果、人材や財政の制約があったものの英語の普及に見られるように一定の「成果」を上げた。これに対して対米戦争開戦後の一九四二年にフィリピンを占領した日本も日本人教員を送り込み、日本語を中心に大東亜共栄圏構想を受容させるべく日本式の普通教育政策を展開した。本論では、この経過を踏まえて、日本占領下の普通教育に関するフィリピン人たちの記憶を分析する。

これまで、フィリピン統治の日本語教育についてはさまざまな研究がなされてきた。例えば教材や教授法、教育制度・政策、あるいは普及理念について取り上げたり、また派遣された日本人教員の記憶を分析したりするものである。しかし、日本による教育がフィリピン人たちにどのように意味づけられたのか、そのなかで先行したアメリカ支配がどのような影響を与えているのかを論じたものは、ほとんどない。

そこで本論では、日本語教育に対してフィリピンの人々に残された記憶を、これまで
当地で出版された回想録、ならびに聞き取り調査結果を利用して検討し、普通教育
を軸とした日本帝国と欧米帝国との関係を考察したい。具体的には、フィリピン
におけるアメリカ統治および日本統治関連の多くの資料を所蔵しているアテネオ・
デ・マニラ大学の所蔵資料のうち、(*World War, 1939-1945 - Personal*
narratives, Filipino)と(*Philippines — History — Japanese occupation, 1942-*
1945 - Personal narratives, Filipino.)のタグがついているもので、同作者同作品を
除く四五の英語著書を中心に調査した。これら大部分が戦争経験者自身の
作品であり、英語教育を受け、自著を出版できる恵まれた社会層に位置する人々
の見解に偏ることは避けがたい。そもそも、フィリピンは植民地支配を契機に
国境線が引かれた「多言語多民族国家」であり、今日ですら国民形成が進んでい
ないとされる。したがって、ここでの議論は「フィリピン」と呼ばれる地域に残った
個々人の記憶を扱っている。ただし後述するように、彼らの記憶へのフィリピン社会
の影響は無視できない。

さらに明示すべき点は、日本語教育に言及している回顧録が少なく、たとえ触れてい
たとしてもわずかな記載にとどまる文章が多かったことである。回顧録の大部分は、
日本軍による抑圧や戦火、そしてゲリラ活動といった苦難にいかに立ち向かったの
かに焦点を当てている。

302

占領下日本語教育はフィリピンでいかに 記憶されたか

あてている。これは、そこがもっとも語りたい、また一般的に需要のある「物語」で
あるためであろう。日本語教育は、多くの場合これにあたらないと考えられる。それは、
本稿で取り上げている日本語教育に関連する記憶の多くが、研究者のような

だいさんしゃ ちょうさ へんさん しょせき いんよう しめ
第三者の調査・編纂による書籍から引用されたものであることから示されて
いる。

ほんこう げんかい ふ がわ きおく ぶんせき
本稿は、このような限界を踏まえて、フィリピン側の記憶を分析する。

これにあたって注 目 するのは教室 という場である。というのも、教室 はいわゆる
「コンタクト・ゾーン」と考えられるからである。コンタクト・ゾーンは、植 民 地
じょうきょうか しはいしゃ ひしはいしゃ かいこう くうかん るん がいねん
状 況 下 における支配者と被支配者が邂逅する空間を論ずるための概念として
メアリー・L・プラットによって提起され、現在 はさまざまな事象の分析に用い
られるようになっている。言語や思想を統制する 教 育 が実践される場である 教 室
は、植 民 地 支 配 を考 察 する上でもつともふさわしい空間といえる。

したがって、教 室 を巡って提示されるフィリピン人の日本 占 領 期の記憶、なかでも
とうじしゃ きょうし せいと おも とり あ
当事者である教師と生徒を主に取り上げたい。

ほんろん こうせい だいいっしょう にほんごきょういく がいよう お
本論の構成は、まず第 一 章 でフィリピンにおける日本語教育の概 要 を押さえる。
つぎ だいにしょう にほんごきょういくにかん がわ きおく きょうし せいと ちゅうしん
次に第 二 章 で、日本語教育に関するフィリピン側の記憶を教師と生徒を 中 心 に
せいり だいさんしょう きおく かた ば えいきょう あた
整理する。つづく第 三 章 において、記憶が語られる場に 影 響 を与えたポスト・コロ
ニアルな国際関係を論じる。そして第 四 章 で、彼らの記憶を生み出した要 因
について、フィ

りピン・アメリカ・日本の関係に注 目 して分析したい。

いち せんりょうか にほんごきょういく てんかい 一、占領下における日本語教育の展開

もとかしいちとしかがづにがつ あじあたいへいようせんそうかいせん ご にっぽん しはいけん なんぽうかくち およ にほ
一九四一年一二月のアジア太平洋戦争開 戦 後、日本 の支配圏は南方各地に及び、日
んごきょういく ちいき せんりょうせいさく しゅじく い せんりょうじつむ
本語教育は、この地域における占 領 政 策 の主軸の一つになった。これは、占 領 実 務
すいこう にっぽんしはい せいとうせい しんとう こんぼんてき かだい たっせい ふかけつ
の遂行と日本支配の正 統 性 の浸透といった根本的な課題の達成に不可欠であっ
たからである。この日本語教育に関する政府の方 針 は、一九四二年八月に閣議決定
し、みなかたしよちいきにほんごきょういくなみふきゅうにかん けん しめ にほんごき
した、「南方諸地域日本語教育並普及に関する件」で示された。これによると、日 本

よういく にほんごふきゅうにかん しょうほうさく りくかいぐん ようきゅう もと もんぶしょう
語教育ならびに日本語普及に関する諸方策は、陸海軍の要求に基づき文部省
きかくりつあん しよう きょうかしよ きょういん どうよう
において企画立案することになっていた。使用する教科書や教員についても、同様
わくぐ きてい ぐん しゅどう めいじ
の枠組みで規定されており、軍の主導が明示されていた。

かくぎけつていいこう なんぽう にほんごきょういく そしきか
この閣議決定以降、南方での日本語教育が組織化されていくが、フィリピンではこれ
さきど かたち とうち しはい ぐん もとちかよん にねんにかつ きょういくほうしん うちだ
を先取りする形で、当地を支配した軍が一九四二年二月に教育方針を打ち出し
ていた。そのなかで重視すべき点として挙げられたのが、

1.①とうあきょうえいけん いっかん しんちつじょけんせつ いぎ にんしき 2.②べいえいいぞん しそう
の根絶と東洋人としての自覚に基づくフィリピン文化の建設、3.③ぶつしつへんちょう
こんぜつ とうようじん じかく もと ぶんか けんせつ
の根絶と東洋人としての自覚に基づくフィリピン文化の建設、3.③物質偏重の
はいじょ どうぎ かんよう にほんご ふきゅう えいご しょう ぜんじはいし しょうきょういく
排除と道義の涵養、4.④日本語の普及と英語の使用の漸次廃止、5.⑤初等教育の
ふきゅう じつぎょうきょういく ふ
普及と実業教育の振

303

きょう きんろうせいしん こすい いじょう きょういく ろくげんそく 興、勤労精神の鼓吹、以上の教育の六原則 こうようご にほんご きょういく で、公用語となった日本語の教育

きょう きんろうせいしん こすい いじょう きょういく ろくげんそく こうようご にほんご きょういく
興、勤労精神の鼓吹、以上の教育の六原則で、公用語となった日本語の教育は
ぜんたい きばん
これら全体の基盤であった。しかし、④にあるように、英語が即時廃止にならなかったの
やくよん ねん およ ふつうきょういくせいさく けっか えいご しゃかい しんとう
は、約四〇年にも及ぶアメリカの普通教育政策の結果、英語が社会に浸透して
いっき とりのぞ しゃかいてきこんらん じめい
おり、これを一気に取り除くことは社会的混乱をもたらすことが自明であったからで
ある。

ほうしん ぜんてい もとちかよん にねんはちがつはじ がっこう ほんかくてき さいかい
この方針を前提として、一九四二年八月初めごろから学校が本格的に再開して
にっぽん せんりょうとうち はじ とうしょ にほんごきょういく だいぶぶん へいし にな
ゆく。日本の占領統治が始まった当初は、日本語教育の大部分を兵士が担ってい
ちあん あんてい せんもんか ないち よ ひつようせい いしぎ
たが、治安が安定するにつれて専門家を内地から呼ぶ必要性が意識されるようになった。
もとちかしそうねんいちがつまつ さんがつなか いち つきしよじゅん さんかい にほんご
た。そこで、一九四三年一月末、三月半ば、一〇月初旬の三回にわけて、日本語
きょういん いちはつ めい おくりこ かれ おお いっぱんおうぼ せんこう
教員たち一八〇名あまりが送り込まれた。彼らの多くは、一般応募からの選考をへ

て、首都マニラのあるルソン島を中 心 に派遣された。その募集にあたって要件とされたのが、英語能力であった。これは、先 述 のようにフィリピンにおける英語の影響力は大きく、当座の使用は認めざるを得なかったからである。当初は比較的安定した治安のもと教務を果たせたが、アメリカ軍の反攻とともに各地で日本語教育が中止され、一九四四年五月には大部分の女性教員たちは内地へ避難し、同年九月二 一 日のマニラ空襲の前後で実質的に教員としての任務は終焉を迎えたと推定される。

二、日本語教育の記憶

二、日本語教育の記憶

推定一〇〇万人を超える現地人の死を残し、最大の賠償金が日本から支払われたことでも示唆されるように、フィリピンは日本の帝国支配の暴力性をもっとも顕在化した地域のひとつといえる。こうしたなかで展開された日本語教育は、フィリピンの人々にとって、どのような存在として記憶されたのだろうか。

回顧録に日本語教育に関する記述が少ない要因としては、先に述べた事情の他にも日本統治時代に公的な教育を受けていない人が多数いたことがある。そもそも日本の教育行政の基盤となったアメリカ統治期の公教育も不完全なものであり、多くの不就学の児童が存在した。その上で、人材・教材の不足、そして治安の不安定さなどにより、日本統治期に再開されなかった学校が、セブやレイテなどさまざま地域に広がっていた。例えば、日本軍の教育方針でも重視されており、イデオロギー宣伝の基盤として優先して再開された初等教育でさえ、一九四三年三月の時点での報告では、開校数一二二二七校、登録生徒数二六万七九七七人となっていた。これらの数値が日本による教育の最高到達点であったかどうかは不明だが、戦前の開校数八七二四校、登録生徒数一三三万四三三五人という数値と比べて著しく少なかったのはまちがいない。生徒側の不就学の理由と

せんりょうかにほんごきょういく

占領下日本語教育はフィリピンでいかに

記憶されたか

しては、彼ら自身の経済的な苦境もある。文献に表れた例を挙げると、学校は再開されたものの、食料調達のための取引に行かざるをえなくなった生徒や、野球のグローブをつくっていた学齢期の少女たちがいた。また家族、とりわけ父親の意思で教育を受けられなかった人達もいる。これは、親たちのナショナリズムや愛国心にもと基づく日本支配への抵抗の一環である。教育を重視する親の場合、彼ら自らが教育を授けたり、日本軍政当局の目を逃れて「地下」学校に通わせたりした。

このような限界はありつつも展開された日本占領下における教育の現場に関して、どのような言説が残されたのだろうか。再開された公的な教育機関では、日本人教師の指導の下、教育を施す側にフィリピン人がいた。突然強制された日本語教育に対する抵抗感が、フィリピン人教員たちのなかにあったことは、その言動から日本人教員も察していた。もちろん、目の届かないところで彼らが教室で生徒に何を話していたのか、日本人には知るよしもなかった。フィリピン側の記憶では、例えばあるフィリピン人女性教員は、授業のなかで繰り返し生徒たちに、日本の占領支配は一時的なもので、すぐにもとの状態に戻る、アメリカがフィリピンに帰ってくるのに長い時間はかからない、と述べていたことがわかる。後に、彼女は抗日ゲリラに加わっている(33)。

しかし一方で、日本語教育への関わりに、より積極的な視点を見出す教員もいた。彼らの言説には、日本語教育との関わりだけでなく、日本人との関わりにおいても肯定的な見解が含まれる。たとえば、日本語を担当することになったルソン島南部のシボコットのフィリピン人教員は、次のように述べている。「私は小学校が再開されたとき、教鞭を執るように頼まれました。日本軍政当局のもとで教えることは、楽しかった。私個人の意見ですが、日本人はいい人たちで、私たち教員を敬意と寛容をもって処遇してくれました。日本語を教えることができるようになるために、

まいしゅうどようび にっぽんじんきょうし がくしゅう もと わか とうじ
毎 週 土曜日、日本人教師のもとで学 習 することが求められました。若かった当時、
おし やさ にほんへい した たの
教えることや優しい日本兵たちと親しくなることを楽しみました⁽³⁴⁾。」

このような 教 員 側 の対 応 対 して、教えられる側にはどのような記憶が残ったの
だろうか。例えば、小 学 校 三 年 生 の時 に再 開 された学 校 に復 帰 したキンターナは、
にほんご かいわ さくぶん なら にほんご た が る ぐ ご ひょうげん えいご はな
日本語の会話と作文を習い、日本語とタガログ語で表 現 するようになった。英語で話
すことは完全に止められ、「私 には何が起っているのかわかりませんでした。私 が
にっぽん わるぐちをい せんせい ふつう
日本について悪口を言うたびにストレスがたまっておどおどした先生は、普通に
せんさくず しょうねん こころ こた にっぽんじん かんし め
詮索好きな少 年 の 心 にうまく答えることができませんでした。日本人の監視の目
を恐れている教師から小言を言われることなく、みんなが好きにものを言い、行 動 でき
た戦 前 のよかった時代がもどってくることを切 望 していました。人生で初めて憎しみ
ことば い み まな このしゅ げんせつ にっぽんじんにたい
という言葉の意味を学びました⁽³⁵⁾。」この種の言 説 からは、日本人に対する

305 恐怖が教 室 内に満ちていたことを察することができる。

こうした学 校 内の空気に、カリキュラムの変化も 影 響 した。公 教 育 の場では、
アメリカ帝国の色を払 拭 し、大東亜共栄圏構 想 に沿ったものに置き換えるべく、
きんしょそち と つか え せい きょうかしよ かんれん
禁 書 措置が執られ、使わざるを得なかったアメリカ製の教 科 書 は、アメリカ関 連 の
じんぶつ ばしょ しゃしん ぶんしょう くるめ とりのぞ せいようぶんか
人 物 や場所の写 真 や文 章 が黒塗りにされたり、取り除かれたりした。また西洋文化
の 影 響 の濃い地理、歴史や文 学 といった科目が変 更 ・ 中 止 された。ラジオ体操を含
めて、これらの日本式 教 育 導 入 の結果、真 剣 に 勉 強 することをやめる生徒たちが
で 出てきた。このように子供側でも、新しい教 育 内 容 に拒否反応があったようだ。
げんせつ にっぽんしはい いっかく し にほんしききょういくにたい ひていてきかんじょう
これらの言 説 には、日本支配、その一角を占めた日本式 教 育 に対する否定的 感 情 、
たい かんけい えいきょうか こうちく せんぜん きょういくにたい
そしてこれと対の関 係 にあるアメリカの 影 響 下に構 築 された戦 前 の 教 育 に対す
るノスタルジアが見て取れる。

ところが一 方 で、日本語学 習 に楽しさややりがいを見出した者もいた。マニラに
きょじゅう だんせい いもうと にっぽんじん にほんごきょういく ていきょう
居 住 していた男性の 妹 は「日本人によって日本語教育が提 供 されるように
なったとき、ただ楽しさから日本語を 勉 強 した」ようだ。また、日本の占 領 統 治 が始

とうじかずぞうさい だんせい めいかい えいご はな にほんへい たんにんきょうし
まった当時一三歳だった男性も、明解な英語を話すことができる日本兵の担任教師
から日本語の基礎を学び、日本の文字を書くことを級友とともに楽しんでいたと
いう。日本語を書き話すための知識を得るのにも積極的で、日本について、人々の
せいかつ ぶんか でんとう てんのう さむらい だいひょう にっぽん ほうけんじだい はなし かんしん も
生活、文化や伝統、天皇、侍に代表される日本の封建時代の話に関心を持ち、
にっぽんこっか なら にほんご ただ かきかた こじんてき おし にほんへい ともだち
日本国歌を習った。日本語の正しい書き方を個人的に教えてくれた日本兵の友達
によって、「物語のなかだけでしたが異国への冒険に対する、また教育に対する私の
かつぼう あるていどみ の ぼうけんにたい きょういくにたい わたし
渴望は、ある程度満たされました。」と述べている。これらは、日本語学習にフィリピン
んじんせいと ねっしん とりく にほんごきょういん きおく ふごう
ン人生徒が熱心に取り組んだとする日本語教員の記憶と符合する。

きょうしつ ようす さき ふ にほんぐん きんちょう きょうふ まぎやく
教室の様子にも、先に触れたような日本軍がもたらした緊張や恐怖とは真逆の
ものがある。こうつこうこう かよ だんせい る そんとうちゅうぶ しゅう きょうだい
公立高校に通っていた男性(ルソン島中部のラグナ州)が、その兄弟
に語ったところによると、彼の日本語教員はミスター・モツィモト(Motsuimoto)と
いい、見たところ愚鈍そうで、神経質な少女のように話し、服装も珍妙に見えた
こともあって、クラスメイトのなかでは、笑いものになっていた。ある日、先生が日本の
きよく うた せいと かれ み お き いく
曲を歌わせていたとき、「生徒たちは、彼が見落としている「こと」に気づくのを、息
を殺して待っていた。しかしもう彼らは待ちきれなくなって、声を出して笑い、手を
たたいた。モツィモトは静かにするように合図をして、両手を下げてポケットに入れた
とき、ボタンを閉め忘れていたズボンの前が大きく開いた。クラス全体がさらに
だいばくしょう はくしゅ おお せんせい いか すばや ぜんたい
大爆笑になり、拍手が大きくなった。先生は怒りもせずに、素早くズボンのボタンを
と 留めて、しずかには がまん じんぶつ こうどう き ふ
静かに恥ずかしさを我慢していた」。この人物の行動は、気に触れることがあれ
ばすぐに怒鳴りだしたり、平手打ちしたりしたフィリピン人のなかにある典型的

306

せんりょうかにほんごきょういく 占領下日本語教育はフィリピンでいかに きおく 記憶されたか

にっぽんぐんじんぞう まった そ
な日本軍人像には全く沿わない。

ちてきこうきしん たいしょう きょういん かんけい りょうこう こうちく
知的好奇心の対 象 となったり、教 員 との関係が良 好 に構築されたりすれば、
はん にちかんじょう きょうせい てき にほんごきょういく せっきよくてき い み みいだ
反日感情がありながらも、強 制 的な日本語教育に積 極 的な意味を見出すことも
あった。例えば当時高校生だった女性の母親は、にっぽん てきい めいかく ら
ジオ体操や日本軍歩 哨 への敬 礼 を子供にさせなかった。こうした両 親 の影 響 を受
けて、彼女も日系人のクラスメイトのいないところで反日感情を表 に出したり、
がっこう ちか れんこう あめりかじん て ふ おく
学校の近くに連行されたアメリカ人に、こっそり手を振り、Vサインを送ったりした
こともあった。こうした反日感情とアメリカ帝国支配の復活への期待がありつつ
も、日本語教育の記憶には肯定的な面がある。彼女は「日本語はもちろん必修科目
でした。日本の文字を書くのが楽しかったので、日本語の授 業 はおもしろかったです。
わたし たんにん なまえ やさ せんせい せんせい
私たちの担任は、ミス・ツナシマという名前の優しい先生でした。先生は『さくら』
という有名な日本の歌を教えてくださいました。ある日、先生は 私 をそばに呼んで、私
のきれいな習字を褒めてくれました」と記している。このように日本の支配への
ていこうかん も せいと にほんごがくしゅう せっきよくてき い み みいだ ばあい
抵抗感を持っていた生徒にも、日本語学 習 に積 極 的な意味を見出している場合が
あった。こうした語りから、日本 占 領 下、日本語に取り組まざるを得なかったフィリピ
ンの人達の 状 況 を察することができる。注 目 すべきは、旧 支配者のアメリカ
にたい いしき にほんごきょういく きょういん にたい きおく たよう
に対する意識と、日本語教育や教 員 に対する記憶が多様なことである。

さん にほんごきょういく きおく せん ごこくさいかんけい 三、日本語教育の記憶と戦後国際関係

ぜんせつぼうとう の にっぽん しはい ぼうりよくせい し
前節冒頭で述べたように、日本によるフィリピン支配の暴 力 性はよく知られて
いる。したがって、理不尽な平手打ちのような 辱 めと結びつく`Kural`(こら!)と残忍
な拷 問 と死が結びつく`Kempeitai`(憲兵隊)が、フィリピン人の記 述 にしばしば
とうじょう みみにのこ にほんご しょうちょう にっぽんとうち すがた
登 場 するのは、耳に残る日本語が象 徴 する日本統治の 姿 といえる。つまり、この
`Kural`と`Kempeitai`は、緊 張 や恐怖や暴 力 にあふれた社会における、無力な
ひしはいしゃ み きんしつか かた とら ちゅう きょうしつ ひていてき きおく
被支配者に見られる「均質化の語り」と捉えられる(注 25)。教 室 での否定的な記憶
は、にっぽん ていこくしはい かた きんしつか いちよく にな いっぽう
は、日本の帝国支配のもたらした語りの均質化の一 翼 を担っているといえる。一方
で、これと真逆の、たとえば日本語を学ぶに当たっては主 体 的な自己の意思があった
こと、あるいはきょういん こうていてき かんけい い じ しめ いしつ かた
教 員 との肯定的な関係が維持されていたことを示す「異質な語り」

もある。この種の語りの意味するところは何であろうか。まずここでは、そもそもこうした語りが受容されるようになった社会的背景を考察してみたい。

戦時における出来事の記述や聞き取りによって残された記憶が、当該事象が生じた時代に得たものの自体ではなく、あくまでそれを想起した時点から見た過去という性格が付与されることは、今日しばしば指摘されるところである(注26)。しかも、その構築は、個々人で完結しばしば指摘されるところである。

307

フィリピン・アメリカ関係

三ーフィリピン・アメリカ関係

しているわけではなく、当事者を取り巻く社会的関係が影響し、記憶の語りや提示を根底から規定するマクロな「語りの磁場」が存在する。そこでここでは、占領時の日本語教育に関する記憶の異質性を、語りの場であるフィリピン社会と、日本およびアメリカ両国との戦後の関係から論じたい。

基点となる終戦直後、日本統治がフィリピン人にもたらした衝撃は、アメリカ植民地期が「黄金の時代」であり、日本占領期が「暗黒の時代」という歴史言説を作り出すことを可能にした。また、フィリピンを解放するためのフィリピンとアメリカの共同戦線は、フィリピン人とアメリカ人の兵士たちが力を合わせた犠牲的行為、つまり共通の受難・死・復活として解釈された。こうした解釈の基盤が、フィリピン・アメリカ、そしてフィリピン・日本の関係の変化にどのように影響されたのかを見てゆく。

まず、アメリカとフィリピンとの関係に焦点を当ててみたい。先述のように日本占領期についての認識は、アメリカに関する認識と密接に関係しており、実際、

引用した回顧録のいくつかでもそれが察せられる。したがって、戦後フィリピンにおける対米感情の推移を押さえておく必要がある。

戦後、アメリカが解放者となったことにより、合衆国市民・企業に対する特恵や基地提供のような植民地関係は継続することになった。以降のフィリピン・アメリカ関係は、このコロニアルな性格が暫時希薄化してゆく歴史と解釈できる。これには、一九七四年の特恵通商関係や内国民待遇の終了、日本の台頭による通商関係におけるアメリカの相対的地位の低下がもたらしたところが大きいの。さらにより重要な意味を持ったのはアメリカ軍基地の存在である。一九四七年の基地協定で米兵などの司法管轄権や基地使用の権限に関して一方的にアメリカ側に便宜が提供された。この基地の存在は米兵が繰り返す犯罪、ベトナム反戦運動や学生運動とあいまって、反米ナショナリズムの象徴となってゆく。このフィリピン側の基地反対運動、ナショナリズムの高まり、アメリカ側にとっての基地の戦略的地位の低下や維持のためのリスクやコストの上昇、アメリカの支援下で独裁政治を行ったマルコス政権の崩壊、そして一九九二年のピナツボ山の噴火被害により、スービック、クラーク両米軍基地は完全撤収に至る。これにより、一八九九年以降の軍事力を背景としたコロニアルな二国間関係に一つの区切りがついた。

こうした流れとともに、政治軍事面あるいは経済面でのアメリカの影響力が衰退してきたことは、アメリカと日本を善悪として対比する見方を希薄化する背景となったと考えられる。その上で、より直接的な影響を与えたものとして、次の二つをあげることができよう。一つは、フィリピン社会で広く受容されてきた植民地支配を正

ピンでいかに記憶されたか

とうか がわ るんり おんけいてきどうか ぶんめいか ひてい
当化するアメリカ側の論理、すなわち、恩恵的同化としての文明化を否定するレイナ
ルド・C・イレートのような知識人が登場してきたことである。例えば、著名な歴史
がくしゃ ちよしよ うんめい さいげつ
学者テオドロ・A・アゴンシリオは、その著書『運命の歳月——フィリピンにおける
にっぽん ぼうけんもとかしいちいちいきゅうよんじゅうご にっぽん きょういくぎょうせい そと きょうせい
日本の冒険一九四——一九四五』で、日本の教育行政を、外からの強制
てん しさく どうれつ いち にっぽん あめりかか
という点でスペインとアメリカの施策と同列に位置づけ、日本によるアメリカ化の
ひてい にっぽん こくえき そ あめりかか ふいりびんじん
否定は日本の国益に沿ったものであるとしつつも、アメリカ化がフィリピン人から
びとく うしな にっぽん しゅちょう いちり
アジアの美德を失わせたという日本の主張には一理あるとしている。

もうひと たいえきぐんじんもんだい こうにち たいにちせんそう しょうり
もう一つは、退役軍人問題である。これは、抗日ゲリラとして対日戦争での勝利に
ふかけつ やくわり は ふいりびんじん たいか たいえきぐんじん
不可欠な役割を果たしたフィリピン人に、その対価であるはずの退役軍人としての
けんり ふよ もんだい せんご ふじょう もとちか
権利が付与されなかった問題である。戦後まもなくこのことが浮上し、とりわけ一九
きゅう ねんいこうおお もんだい たたか むく
九〇年以降大きな問題となった。これはアメリカのための戦いが報われなかった
という認識を生み出す要因の一つになったと考えられる。例えば一九四二年当時
かずぞうさい ざいじゅう にほんご まな にほんぐんかんけい
一三歳だったマニラ在住のオスカーは、日本語を学ぶとともに、日本軍関係の
かか くつみが ぐんじん きんせん え くつみが
ビジネスに関わり、マッサージ・靴磨きで軍人から金銭を得ていた。そのなかで靴磨
ひょう うえ じゅうじゅつ いたいめ あ ぐんじん か おお
きの費用をごまかされた上に柔術で痛い目に遭わされた軍人のことを書き、多くの
ふいりびんじん だいとうあきょうえいけん あじあじん
フィリピン人は、大東亜共栄圏のスローガンである「アジア人のためのアジア」の
にっぽんじん たしょう せんとう どうじ ひていてき
ような日本人のプロパガンダによって多少なりとも洗脳されていたと当時を否定的
かえ いっぽう わたし よそお
にふり返っている。しかし一方で、「私たちのビッグ・ホワイト・ブラザー」を装っ
あめりかじん きたな かつどう おこな ひはんてきにんしき ひょうめい
て、アメリカ人も汚いプロパガンダ活動を行っていたという批判的認識も表明し
てい。こうした認識に退役軍人たちの処遇も影響していたと考えられる。

にちべいふた ていこくしはい かさ ひょうか かんぜん ぶんり
フィリピンでは、日米二つの帝国支配が重なったため、それぞれの評価を完全に分離
おこな とかんが しよくみんちき おうごん
して行うことはできないと考えられる。したがって、アメリカ植民地期が「黄金の
じだい にんしき うす げんそう
時代」という認識が薄れ、ビッグ・ホワイト・ブラザーが幻想であるとわかったとき、
にっぽんとうち いみ ひていてき かいしゃく げんてい よち で
日本統治の意味が否定的な解釈に限定されない余地が出てきたのだろう。

さん にっぽんかんけい 三ニフィリピン・日本関係

アメリカとの関係は前節のように変化したのに対して、戦後日本とフィリピンとの
関係に見られる大きな流れは、占領体験に基づく反日感情が徐々に沈静化する
過程であったといえる。そこには経済成長を背景にした日本の影響力の拡大
がある。一九七〇年代になると、日本の通商および投資に門戸が開かれ、日本人が
戦没者の慰霊碑を建てることも許されるようになった。一九八〇年代になると日本
からの投資が拡大し、フィリピン人のなかには日本軍の残虐行為の話を持ち出すの
は賢明ではないと公言する者も出てくる。こうした風潮は、フィリピン国内の
日系人たちの行動にも反映されている。反日感情から出自を隠して生きてきた
彼らが、一九八〇年代初頭に

309

はフィリピン日系人会を公益法人としたり、初めて海外日系人大会に参加したり
して表舞台に出られるようになった。

日本占領時関連の文献で、この変化への対応が明示されるのが、一九七八年
発行のアルフォンソ・P・サントスの『フィリピン戦線の日本兵——草の根の証言
集』である。その冒頭に、フィリピンを占領した日本兵がすべて残虐であったわけ
ではなく、この書は日本占領期に日本人がフィリピン人に与えた親切的な行為に触
れるものであることを明記している。そしてこの出版を導いたのは、フィリピン人と
日本人が平和のために和解し、国際社会の構築に寄与する時代になったという信念
であるとしている。フィリピン社会における変化のなかで、こうした趣旨の書籍を
発行することが可能となり、この種の事業が契機となって、日本人との肯定的な
関係が部分的であれ、記述されたり語られたりするものがさらに世に出てきたのだろ
う。例えば、多くの証言を集めた『日本統治下のフィリピン——記憶と省察』では、
「親切的な日本人」の節がもうけられ、個人の回顧録である『マニラ——第二次世界大

『戦の思い出』には、戦前の出来事を含め、単に抑圧や暴力だけではない、日本人とのさまざまな交流の場面が描かれている。

この延長線上で、前節で触れたような教える側にしても学ぶ側にしても、日本占領下の教育に対する積極的な態度をとった経験の表記が可能になったと考えられる。もちろん、日本統治時代の悪夢が完全に消えることはなく、当時の日本語学習に対する否定的な感情は表明されている。例えば、占領下で日本人と交流が深かった者について「日本人(Jap)に取り入ろうとするフィリピン人には日本語の知識があるものがいたね。たいてい彼らはもともと役人で、役所で高い地位に就いていた。あの人たちには、庶民は非常に怒っていたよ。内通者だよ!裏切り者だよ!」という語りがある。日本語能力を保持した側もこうした感情を意識していたのか、自分の能力のおかげで、日本兵とフィリピン人とのもめ事を大事に至らせず、あるいは無実の同胞を助けることが可能になったという物語がしばしば見られる。ここには、戦中の日本軍と協力した行動を擁護されるようになったエリートたちと異なり、戦中の一般庶民の対日協力者が戦後さまざまな形で報復を受け、時を経ても名誉回復が進まなかったことも影響しているのかもしれない。

それでも全体としては、一九八〇年代以降鮮明となる対日感情の改善という点では、無視できない。さらに一九九〇年代に入ると日本の経済的影響力の浸透がさらに進み、フィリピンに進出する日本企業が目立つようになり、日本で働くことを夢見るフィリピン人が増加した。これにより日本の存在、そしてマイナスイメージでしかなかった日本語能力が積極的な意味を持つようになった。この流れのなかで、過去の日本語教育に関して異質な記憶を表明することが可能になったと考えられる。

せんりょうかにほんごきょういく

占領下日本語教育はフィリピンでいかに

記憶されたか

せんちゅう にっぽん きょういく けいけん ひとびと せんちゅう せんご
戦中に日本の教育を経験したフィリピンの人々は、戦中だけでなく、戦後も
にちべいりょうこく せめぎあ いち せんざい
日米両国のせめぎ合いのはざまに位置した存在であった。フィリピン・アメリカ
かんけい
関係、そしてフィリピン・日本関係の変遷を見ていくと、太平洋戦争直後のフィ
リピンにとって善悪が明白であった日米の位置づけが大きく変化したことがわかる。
せんりょうき にんしき はんえい にっぽんとうちだいい きょういくにかん いしつ えが かた
そのことが占領期の認識に反映し、日本統治時代の教育に関する異質な描き方
かのう
が可能になったのであろう。

四、二種類の教員と英語

これまで、フィリピンを巡る国際関係の変遷により「異質な語り」の余地が生まれた
ことを示してきた。では、そもそも日本語教育経験がフィリピン人に多様に語られる
よういん
要因はどこにあるのだろうか。当然予期される、教育方針やフィリピン人への対応
にかん ちいきてき じきてき さい えいぎょう
に関する地域的・时期的差異の影響はあるが、ここでは教室で主導的な役割を果た
した教員を中心に分析したい。各教員の個性を超えた差異として注目する
のは、教務を担った軍人(ここでは「軍人教員」とする)と民間人教員が併存し
ていたことである。この前者については、先行研究はなきに等しい。というのも、
にっぽんとうち かてい ぐんじん にほんごきょういく にな いちじてき ちあん そうたいてき あんてい
日本統治の過程で、軍人が日本語教育を担ったのは一時的で、治安が相対的に安定
してからは民間人が動員され、日本語教育が本格化したという印象があるからで
ある。

しかし、日本語教育が普通教育として制度的に行われていたのは、一九四二年八
つきごろ もとちかし しねんくがつちゅうじゅんごろ やく にねんかん みんかんじんきょういん
月頃から一九四四年九月中旬頃までの約二年間で、そのうち民間人教員の
だいふぶん はけん もとちかしそうねんいちがつまついこう みじか るく
大部分が派遣されるのが一九四三年一月末以降である。したがって、短くても六
かげつかん ぐんじん しゅどう みんかんじんきょういん ふにん ころ あるていどにほん
ヵ月間は軍人が主導し、民間人教員が赴任した頃には、これによってある程度日
ごきょういく しんとう とかんが もとちかしそうねんにつじゅうごにち にほんご
本語教育は浸透していたと考えられる。というのも一九四三年二月一五日に日本語

によるプロパガンダ雑誌である『週刊ニッポンゴ』が創刊されたからである。その
第一号に「ハジメハムツカシイトオモツタニッポンノコトバモコノゴロハタノシクベ
ンキヤウデキマス。」(二頁)という学習者による執筆という体裁の記事がある
ように、この雑誌は日本語のある程度の普及を前提としていた。したがって民間人
教員派遣前、軍人教員は日本語教育の構築に大いに寄与したといえる。

また、民間人教員の派遣が始まった後も、地域によってはその配置がなされなかった
ところもあった。元教員がまとめたデータに基づく、彼らの約六〇%がマニラを
中心としたルソン島に勤務しており、その他の地域には南部を中心に民間人
教員の空白地が広く存在していたことがわかる。例えば、その一つとして一九四二
年二月から日本統治下におかれた中西部のパラワン島プエルト・プリンセサが
ある。ここで再開された学校教育の現場で日本語教育を担当したフィリピン人
教員の一人によれば、

三人の軍当局者が彼らの家に

出向き、義務であった学校での日本語教育のために講習を行った。彼らは日本語の
歌や国歌、一般的な表現を教えていたようだ。また、ルソン島南西部近辺にあるア
ラバット島の警備隊の記録によると、一九四三年一二月頃、民間人教員と提携し
つつ、所属軍人が小学校での日本語教育に継続的に携わっていたことが
わかる。したがって、民間人教員到着以降も軍人の教育への関わりが継続
した地域があり、フィリピンでは二種類の教員が併存していたのである。

このように、民間人教員到着以前、またその後も、軍人たちによる教育は無視
できるものではなかった。教育を担った軍人たちに関しては、彼らが戦後民間人
教員との交流もなく、本来の業務ではなかったこともあって、残された記録は極
めて少ない⁽¹²⁾。しかし、占領中日本兵によるフィリピン人に対する強圧的な行動
が散見されたことを考えると、現地の人々から脅迫的と受け取られる乱暴な
言動を見せた軍人教員がいたのだろう。一方で、生徒から嘲笑されていたモツ

ィモトは、まず間違いなく民間人教員であろう。彼のエピソードは、フィリピン人生徒との間に当時の日本的な上下関係が希薄であったとする元民間人教員たちの手記に通じるような内容であった⁽¹³⁾。この軍民の相違が、教室におけるフィリピン人の記憶に影響していると想定される。

この二種類の属性に連動した、教員に対する認識の相違の要因をさらに探ってゆきたい。そもそも、占領時にフィリピン人たちはいかなる日本人観を持って、日本人と関係を築いていたのだろうか。

プラットのいうコンタクト・ゾーンには、「通常それは強制や徹底的な不平等や手に負えない対立を伴っている」ものの、単純で一方向的な支配と抑圧ではなく、力関係は非対称性ではあるものの、相互交渉として見る視点が重要とされる⁽¹⁴⁾。これが、日本対フィリピンとの関係の場合、日本統治以前の植民地体験により、さらに複雑である。なぜなら、スペイン・アメリカの統治をへて、西洋化という文明化をフィリピンは長期にわたって既に経験していたからである。その結果、マニラのような都市部では道路や電気など社会インフラが整備され、教会によるキリスト教そして普通教育による知識・教養を受け入れている人も増加していた。この文明化の視点からは、軍事力を除けば、決して日本に引けをとる存在ではないという意識を、フィリピン側に生み出した。

たとえば軍政要員として派遣された皇睦夫は、一九四四年後半にルソン島北部の比較的豊かな農村家庭に世話になったときに、この家の女性に基礎的な方程式の問題を出された経験を述べている。「こんな小娘にテストされてたまるか!」と思いつつも、簡単にこれを解いてみせると、相手は驚きの表情を浮かべたという。当時憲兵であった佐竹久もフィリピン人たちが「日本には電車があるのかとか、汽車があるのか等と、比島をさも文明国家のごとく思い込んでいたことは、まことに幼稚で滑稽でならなかった⁽¹⁵⁾。」と述べており、

せんりょうかにほんごきょういく

占領下日本語教育はフィリピンでいかに

記憶されたか

にほんがわ じこひょうか あいい にっぽんかん ひろ
日本側の自己評価と相容れない日本観がフィリピンで広がっていたことがわかる。

にっぽんじたい おく くに にんしき うみだ ば ひと とうちじだい
この日本自体が遅れた国という認識を生み出した場の一つがアメリカ統治時代の
ふつうきょういく にっぽんせんりょうまえ しょうがっこう つか きょうざい み にほんご
普通教育である。日本占領前に小学校で使われていた教材を見つけた日本語

きょういん ふくはらはるお にっぽん はらき
教員の福原治夫は、そのなかで日本について、「ゲイジャガールとか腹切り、チョン
すがた さむらい ひきやく だんじょこんよく じんりきしゃ えい の またちきゅうぎ
マゲ姿の侍から飛脚や男女混浴、人力車などが絵入りで載っていた。又地球儀
には中国と同じ色が塗られているのを見て如何にフィリピンが日本について

にんしきぶそく かん しる しはいしゃ にっぽんじんたい ふいりび
認識不足かをつくづく感じた」と記している。支配者となった日本人に対するフィリ
んじん しせん きょういく きばん
ン人の視線は、こうした教育が基盤となっていたのである。

ふつうきょういく かく えいご えいご
このアメリカの普通教育の核であったのが英語である。英語は、アメリカによって

げんちじん ぶんめいか あめりかか めざ ふきゅう はか このけっか もとちかみくねん
現地人の文明化(アメリカ化)を目指して、普及が図られた。この結果、一九三九年の
とうけい ぜんじんこうやくかずろく ばんにん えいごわしゃ やくにじゅうなな
統計において全人口約一六〇〇万人のうち、英語話者は約二七%となった。

ぜんじんこう よんぶんのいちきょう ひりつ あめりかじん きょういく げんかい しめ
もちろん、全人口の四分の一強という比率は、アメリカ人による教育の限界を示
してはいる。しかし、一六世紀半ばからフィリピンの大部分を統治下においたスペイン

ばあい おな とうけい すべいん ごわしゃ やくに ろく ひかく やくよん
の場合、同じ統計でのスペイン語話者が約二・六%であったことと比較すると、約四

ねんかん きょういくせい かい おお しゃかいてき
〇年間のアメリカの教育成果は、大きかったといえる。これにより、社会的

じょうしょう ちい ほぜん えいご ふかけつ けっかてき しゃかいそう くぶん しひょう
上昇・地位の保全に英語は不可欠となり、結果的に社会層を区分する指標となっ

た。このことが、日本人への評価にも関わっている。

にっぽん やばん ないよう ふく ちか きょういく うえ せんりょうか
つまり、日本を野蛮とみなす内容を含んだアメリカ治下の教育の上に、占領下

にほんへい らんぼう ふるま けいけん ふいりぴんじん にほんへいいっばん
における日本兵の乱暴な振る舞いを経験したフィリピン人にとって、日本兵一般の

えいごのうりよく ひんこん にっぽんじんかん しょうちよう ほきょう
英語能力の貧困さは、その日本人観を象徴するものであり、補強するもので

たと きょうかい にほんへい えんぜつ
あった。例えば、マニラのキアボ教会で日本兵が演説したとき、「the Japanes

e love the Filipinos」と言っているつもりが「the Japanese rob the Filipinos」と

はつおん ちょうしゅう おおごえ わら がまん ふい
発音していて、「聴衆は大声で笑うのを我慢できなかった。」なぜなら、それはフィ

りぴんじん くる げんじつ おおごえ わたし えいご さけ
リピン人が苦しんでいた現実だったからである。「大声で私たちは英語で叫んだ。

『そうだよ、まさにそのとおりだよ!』 日本人 将校は、私たちの言葉を自分のことを
みと かいしゃく かんしゃ い しめ ていれべる
認めてくれたものと解釈し、感謝の意を示した」。これらのやりとりは、低レベル
の英語能力が、日本軍政への不満とともに、日本人への蔑視へとつながっている
ことを示している。

いっぽう えいごりよく しゃかいてきひょうか むす のうりよく
一方で、英語力が社会的評価と結びついていたことは、その能力があれば、
にっぽんじんにかん こと にんしき そうてい じっさい ゆうこうてき
日本人に関しても、異なる認識をもたらしたことが想定される。実際、友好的な
にっぽんじん そんざい しめ えいご じょうず かんぺき えいご はな
日本人の存在を示すエピソードには、「英語が上手」、「完璧な英語を話せた」
といった英語能力とつながる言説が多くの場合付随している。そこにはコミュニケー
ションがとれることで、誤解や摩擦が避けられるといった実用的なことだけでなく、
えいごのうりよく にんげん かくづ み て と たし にっぽんじん
英語能力による人間の格付けが見て取れる。「確かにいい日本人もいました。ただ、
まともな日本人は英語をしゃべることができ

313

るわずかな兵士だけでした。英語を知らなければ、その人はひどい兵士です」。こうした
げんせつ えいご ぶんめい きごう にっぽんじん せんべつ つか
言説からは、英語は文明の記号として日本人の選別に使われていたことがわかる。
このことが、第二章で取り上げたような肯定的な記憶が日本語教育や教員に付与
される重要な要因となったと考えられる。具体例を付け加えると、ルソン島北部の町
さいかい がっこう にほんご おし にっぽんじん おしえごとおも じんぶつ
で再開された学校で日本語を教えていた日本人について、教え子と思われる人物の
つぎ かなた わたし かな か ことば きのう おぼ
次のような語りがある。「私に語った彼の言葉を昨日のことはっきり覚えて
います。『なあ、私たちのほとんどがやっぱりひどいやつだったということになるの
かなと思うけど、君たちの幸せを思っていた人もいたことを忘れないでくれよ。』と
にっこり笑って言ったんです。彼の話す英語はとても上手でした……。」彼は地元の
ひとびと ゆうこうかんけい しんし とりく れいがいてき にっぽんじん とりあ
人々と友好関係をつくるために真摯に取り組んだ例外的な日本人として取り上げ
られており、彼が「文明的」であったことを裏打ちする役割を、その英語能力の指摘
が担っている⁵³。フィリピン側の記憶にこうして登場する日本語教員については、
じんぶつ とくてい みんかんじんきょういん してき
その人物を特定できないことがほとんどである。民間人教員であることを指摘

する記述も、管見の限り見当たらない。これには、民間人も軍属として軍服に類似した制服を着用したことも影響していよう。したがって、肯定的な評価を受けた日本語教員がすべて民間人教員であったとは断定できない。しかし、英語能力の点で、これを要件とした選考をへて派遣された彼らには、軍人教員より相対的に評価が高い人が多かったと想定はできる。

また英語力を前提として当地で教務に就くことを予定しており、さらに日本国内での英語排除の風潮のもとで肩身が狭くなっていたこともあって、民間人教員には中等教育で英語を担当していた者が多数含まれていた。これらのことから彼らの学歴は当時としては相対的に高く、師範学校出身者に加えて、東京及び京都帝国大学、早稲田大学や東京外国語学校(現、東京外国語大学)といった高等教育を経た者、女性では地方のミッション・スクールや津田英学塾⁵⁴(現、津田塾大学)の卒業生が多かった。したがって彼らのなかには英語による日本語教育が可能なものもいた。このような経歴を踏まえると、彼らはフィリピン人たちに敬意の対象として記憶される余地があり、他の日本人とは異なった認識を残すことになったと考えられる。その典型とみられるのが、第二章でとりあげた語りのなかで出てきた「ミス・ツナシマ」である。彼女は名前とフィリピンでの勤務校から綱島千代子と特定できる。綱島は津田英学塾を出て高等女学校で英語の教師をしていた。戦時中女学校では英語が随意科目になったり廃止になったりしたが、綱島の学校では廃止になったようだ。そこでフィリピンでの日本語教育に関わることを決意した。彼女は戦後通訳をしており、英語能力は高かったのだろう。勤務校では学生や同僚と「教師冥利をかみしめ」る関係を築いたという認識があり、戦後も交流があったことからマニラでの勤務を「人生で一番有意義

き お く 記憶されたか

「な^{しあわ}仕^{じだい}合せ^{しる}な時代」と記している。学生^{がくせい}側^{がわ}の語^{かた}りも踏^ふまえると、綱^{つな}島^{じま}の思^{おも}いは単^{たん}なる
一^{いっ}方^{ぽう}的^{てき}な見^{けん}当^{とう}違^{ちが}いとはいえない。反^{はん}日^{にち}的^{てき}な親^{おや}の影^{えいきよう}響^うを受けアメリ^{しやうり}カの勝^{しょう}利^りを
待^{まち}ち望^{のぞ}んでいた学^{がく}生^{せい}でも、綱^{つな}島^{じま}の授^{じゅ}業^{ぎよう}や人^{ひと}柄^{がら}に魅^み了^{りよう}されたのは、彼^{かの}女^{じょ}個^こ人^{じん}の資^し質^{しつ}
に^{くわ}加^{ぶん}えて、文^{ぶん}明^{めい}的^{てき}な存^{そん}在^{ざい}と認^{みと}められたからではないだろうか。

植^{しょく}民^{みん}地^ちにおける教^{きよう}育^{いく}機^き関^{かん}は支^し配^{はい}者^{しゃ}が被^ひ支^し配^{はい}者^{しゃ}と向^むきあう「コンタクト・ゾーン」の
代^{だい}表^{ひよう}的^{てき}な場^ばである。日^{にっ}本^{ぽん}統^{とう}治^ち下^かのフイ^{がっ}リ^{こう}ピ^{りやう}ン^{しゃ}の学^{かん}校^{けい}は、両^{しゅく}者^{くず}の関^{かん}係^{けい}の縮^{しゅく}図^ずといっ
てよ^{よう}い^{そう}様^み相^てが見^みて取^とれた。フイ^ふリ^{つう}ピ^きン^{きよう}の普^ぷ通^{つう}教^{きよう}育^{いく}は、も^もと^ととアメリ^{とう}カ^ち統^{めい}治^{もく}の^と名^{めい}目^{もく}と
な^{ぶん}った文^{ぶん}明^{めい}化^かのた^{かく}め^{じゅう}に^に拡^{くわ}充^{じゅう}さ^にれた。日^{にほん}本^{ぐん}軍^きは既^{せい}存^どのこ^{みず}の^し制^{はい}度^どを^に自^じら^らの^し支^{はい}配^{はい}の^ため^めに
て^{てん}ん^{よう}転^{てん}用^{よう}した。こ^ふれ^たに^{てい}よ^{こく}り^し、二^{つぎ}つ^きの帝^{にっ}国^{ぽん}主^き義^きが接^{せい}木^どさ^みれ、日^し本^{はい}の^{かん}教^{けい}員^{いん}は、欧^{おう}米^{べい}文^{ぶん}明^{めい}を
内^{ない}面^{めん}化^かした生^{せい}徒^とや教^{きよう}員^{いん}と向^むき合^あうこ^きに^あな^あった。そ^しこ^{はい}での^い支^{はい}配^{はい}一^い被^い支^い配^いの^{かん}関^{けい}係^{けい}は
ふ^ふく^くざ^ざつ複^{だい}雑^{とう}であ^あった。こ^しれ^しは、大^お東^{とう}亜^あ共^き栄^{えい}圏^{けん}の思^し想^{そう}を教^おえる側^{がわ}の日^{にほん}本^ご語^{きよう}教^{いん}員^{いん}た^{えい}ち^ごに英^{えい}語^ご
の^うり^りょ^りく^く能^{よう}力^{けん}が要^{きよう}件^いとな^うって^ひいた^とこ^とでも^もわ^わかる。アメリ^{きよう}カ^いの^う教^{きよう}育^{いく}を受^うけた人^{ひと}々^{びと}は、
い^ぶん^{ぶん}め^{めい}い^いわ^やゆる^{かん}オ^なリ^いエン^いタ^いリ^いズ^いム^いの文^{かん}明^が一^い野^い蛮^いの^い関^い係^いを^い内^い面^い化^いして^いいたと^い考^いえ^いられ、^いそ^いの
こ^いと^いが回^{かい}顧^こ録^{ろく}に^いも^いあ^いった^いよ^いう^いな^い当^{とう}時^じの^い評^{ひよう}価^かの^い低^{ひく}い^い一^い般^い的^{てき}な^い日^{にっ}本^{ぽん}人^{じん}観^{かん}を^い生^うみ^い出^だした。
し^{しん}か^し、オ^{じん}リ^ぶエン^{ぶつ}タ^{こう}リ^{どう}ズ^ひム^{ひよう}が^か人^き物^じや行^{こう}動^{どう}の^ひ評^{ひよう}価^か軸^{じく}と^いして^い大^{おお}き^いな^い意^い味^みを^い持^もつと、^いそ^いの
文^{ぶん}明^{めい}の^き基^き準^{じゅん}に^そ沿^そった^い素^そ養^{よう}が^いあ^いれば、^い日^{にっ}本^{ぽん}人^{じん}で^いあ^いれ^い肯^{こう}定^{てい}的^{てき}に^い受^{じゅう}容^{よう}さ^いれる^い余^よ地^ちが^い出^でて^いく
る^いこ^いに^いな^いる。親^{しん}米^{べい}フイ^いリ^りピ^りン^{じん}人^{じん}た^いち^いか^いら^いも^い積^{せき}極^{ごく}的^{てき}な^い評^{ひよう}価^かを受^うけた^い日^{にほん}本^ご語^{きよう}教^{いん}師^しが^いい
た^いのは、

おわりに

英^{えい}語^ご能^の力^{りょく}に^いよ^いって^いそ^いの^い基^き準^{じゅん}を^い満^みた^いした^いた^いめ^いと^い考^とえ^とられ^とる。日^{にほん}本^ご語^{きよう}教^{いん}育^{いく}の^い肯^{こう}定^{てい}的^{てき}な
意^い味^みづ^いけ^いを^いも^いた^いら^いした^い理^り由^{ゆう}の^い一^いつ^いに、^いア^{てき}メ^ぶリ^んカ^{めい}的^{たい}文^い明^みの^い体^き得^{とく}を^い意^い味^みする^い教^{きよう}師^しの^{えい}英^ご語^ご
の^うり^りょ^りく^く能^{えい}力^{きよう}が^い影^と響^{かん}した^いと^い考^ひえ^にられ^にるこ^こは、^い皮^ひ肉^{にく}そ^いの^いも^いの^いで^いあ^いる。

フィリピンの人達は帝国間の移動ではなく、アジア太平洋戦争時に、アメリカから日本への支配者の交代という形で二つの帝国を経験した。この交代が戦後体制下のフィリピンでどのように意味づけられたかを考察するために、日本統治の主要政策であった普通教育をめぐる記憶を取り上げた。着目したのは、日本占領が甚大な被害をもたらしたフィリピンで、日本の教育に対して、均質化の語りだけではなく、異質な語りも提示されていたことである。

この現象の背景として、語りの場における戦後の変化があった。これは、フィリピンに対するアメリカの軍事・経済的影響力の相対的縮小と日本の経済的影響力の拡大によるもので、このなかで恩恵をもたらしたアメリカ、悲劇をもたらした日本という単純な認識が崩れた。これによって占領期の教育についての多様な言説が表面化する余地が生まれた。

この多様性を生み出した日本統治期の要因として本稿が注目した

315のは、生徒たちが教室で出会った日本人教員に民間人と軍人の二種類が存在したことである。この種類の相違が意味を持ったのは、英語がフィリピンで文明化と社会的地位を表象するようになっていたからである。アメリカは約四〇年間の統治期に、フィリピン全土における恩恵的同化を目指し、普通教育による文明化を実践した。これにより不完全ではあったものの英語を核にアメリカ文明の浸透が図られるとともに、教育の社会的基盤が広く構築された。アジア太平洋戦争時、日本帝国は最後発の帝国として欧米の支配を軍事力で排除した後、旧帝国の遺産にむき合った。アメリカ化したフィリピンの現状を打破するために、日本は日本語を核とした教育を導入したが、それにあたって、アメリカ統治期に整備が進んだ社会的基盤を利用した。つまり、アメリカによる普通教育が存在したが故に、日本による普通教育は必要となり、また可能となったわけである。

この担い手として、教育を本業とする民間人が導入されたが、彼らにはフィリピンで不可欠な存在となっていた英語力が求められ、その能力ゆえにフィリピン人

たちの文 明の基 準に沿うことになった。こうした経過を見ると、アメリカ統治はフィリ
ピンにおける日本の教 育において本 質的な存在と見なしてよい。この新 旧二
帝国の普 通教 育政 策のかみ合わせがあってこそ、本 論で述べたフィリピン人たちの
日本統治下の教 育の記憶が生み出されたのであろう。

今後の課題としては、日本統治の前にフィリピンを支配していたもう一つの帝国、
スペインとの関係も視野に入れた分析が考えられる。先 発帝国・日本帝国・支配
地域という三角関係は、南方を中心 日本勢力圏で見られた定型的な関係
だが、フィリピンの場合、アメリカ統治前の領 有国スペインが存在した。スペインは、
普通教育と呼べるような教育制度を本格的には導 入しなかったとはいえ、日本
統治期にフィリピンに多くのスペイン人が滞在し、しかもスペイン語には根強い
影 響力があつた。このスペインと日本との関係を教 育面から、アメリカとの
関係も踏まえて研 究したい。

ちゅう
注

1. 近年の代 表 的 な 業 績 として、以下のものがある。駒 込 武 『世界史のなかの
台湾植民地支配——台南長老教 中 学 校 からの視座』岩 波 書 店、二〇一五
年。2. 例えば、以下のような著作がある。石 井 均 「大東亜建 設 審 議 会 と 南 方 軍 政 下
の 教 育」西日本法規 出 版、一九九五年。木村宗男 「戦時南方 占 領 地 における 日
本語教育」木村宗男(編) 『日本語教育の歴史』(講座日本語と日本語教育一五)、明治
書 院、一九九一年、一四五—一五九 頁。太田弘毅 「フィリピンにおける日本軍 政
と日本語教育」「政治経 済 史 学」二三八号、一九八六年、二八—四一 頁。3. 清水
展 「植民地支配の歴史を越えて——未来への投 企 としてのフィリピン・ナショナリ
ズム」西川長夫他(編) 『アジアの多文化 社 会 と 国 民 国 家』人 文 書 院、一九九八年、
一四八—一七一 頁。4. 分析の手がかりとして、この地で教 育 を 施 した側の記憶も
とりあつか
取り扱う。

せんりょうかにほんごきょういく 占領下日本語教育はフィリピンでいかに きおく 記憶されたか

のために、ひきあげたにっぽんじんきょういん 教員たちがけっせい 組織、もとひじまにほんごきょういくよういん「元比島日本語教育要員の
かい 会」によるぶんしゅう 文集、「さむばぎいた」をさんしやう 参照する。このぶんしゅう 文集においても、きょういくにかん 教育に関する
きじゆつ 記述よりも、しゅうせんちよくぜん 終戦直前のじごく 地獄のようなけいけん 経験についてのきじゆつ 記述の方が多い。

1.(1) Pratt, Mary Louise, *Imperial eyes: travel writing and*

transculturation, 2nd ed., New York: Routledge, 2008. 2.(6) 「なんぽうしよちいきにほん
ごきょういくなみふきゅうにかん 本語教育並普及に関する件」『こうあききょういく いち 興亜教育』一卷九号、一九四二年、六頁。3.(7)

わたししゅうだんぐんせい 渡集団軍政監部「くんれいききょういく ねもとほうしん 訓令教育ノ根本方針ニ関スル件(第二号)」『ぐんせいこうほう
軍政公報』

いちごう 一号、一九四二年、一四一一五頁。4.(8) UNESCO-Philippine Educational Fou

ndation, *Fifty years of education for freedom 1901-1951*: prepared under the

auspices of the UNESCO-Philippine Educational Foundation, Manila: National

Printing Co, 1953, pp. 78 and 84 5.(9) Kintanar, Thelma B. et al., *Kuwentong*

bayan: noong panahon ng Hapon: everyday life in a time of war, Quezon City:

University of the Philippines Press, 2006, pp. 108-110. 6.(10) Agoncillo,

Teodoro A., *The fateful years: Japan's adventure in the Philippines, 1941-1945*

(Volume One), Quezon City: University of the Philippines Press, 2001, p. 434.

7.(11) Jocson, Lauro J., *Will there be war?: there was a war when I was a child*,

Quezon City, Philippines: Ateneo de Manila University Press, 2011, pp. 48-50;

Kintanar, op. cit., pp. 110-112; Orendain, Joan, "Children of War," Constantino,

Renato ed., *Under Japanese rule: memories and reflections*, Quezon City: Fou

ndation for Nationalist Studies, Inc. and BYSCH, Toky

o, 1992?, p. 79. 8.(12) まつうらしやうどう とどこおひにっき 松浦勝道「滞比日記」『だいいつしゅう 第一集、一九

むなねん いちいちページ 六七年、一一頁。9.(13) Nuval, Leonardo Q., *Remember them kindly: some*

Filipinos during World War II, Quezon City: Claretian Publications, 1996, pp.

35-37. 10.(14) Karganilla, Bernard LM, "Witness," Constantino, Renato ed., *Under Japanese rule: memories and reflections*, Quezon City: Foundation for Nationalist Studies, Inc. and 11.(15) BYSCH, Tokyo, 1992?, pp. 231-232 12. (16) Kintanar, op. cit., p. 115. 13.(17) De Gonzales, Purita Echevarria, *Manila: a memoir of love and loss*, Alexandria, NSW [Australia]: Hale & Iremonger, 2000, p. 113; Kintanar, op. cit., pp. 113-114. 14.(18) Karganilla, op. cit., p. 232 15. (19) Santos, Alfonso P., *Philippine-Nippon tales: a collection of incidents showing the sunny side of the Japanese occupation of the Philippines*, Metro Manila: National Book Store 1978, pp. 94-95 16.(20) Pimentel, Solomon B., *War in my eyes: a true story during World War II in Mindanao*, Cagayan de Oro City, Philippines: FB Malubay Mini Enterprises, 2002, pp. 36-37. 17.(21) 細田久夫^{ほそだひさお}「三十四年後のマニラ訪問——昭和五十二年三月十九日から二十二日迄」『さむばぎいた』第四集、一九八七年、五八一六七頁 18.(22) Santos, op. cit., pp. 74-75 19.(23) Kintanar. op. cit., pp. 115-116 20.(24) Manalac, Fernando J., *Manila: memories of World War II*, Quezon City: Giraffe Books, 1995, p. 18. 21.(25) 松田素二^{まつだもとじ}「植民地文化における主体性と暴力——西ケニア、マラゴリ社会の経験から」山下晋司・山本真鳥^{しよくみんちぶんか}(編)『植民地主義と文化——人類学のパースペクティヴ』新曜社、一九九七年、二七六一三〇六頁 22.(26) モーリス・アルヴァックス^{しゅうごうてききおく おぜきふじいちろう やく こうろしゃ}『集合的記憶』小関藤一郎(訳)、行路社、一九八九年(原著 Halbwachs, Maurice, *La mémoire collective* (Bibliothèque de sociologie contemporaine). Paris: Presses universitaires de France, 1950) 23.(27) 蘭信三^{らんしんぞう}「中国『残留』日本人の記憶の語り——語りの変化と『語りの磁場』をめぐって」山本有造^{やまもとゆうぞう}(編)『満洲記憶と歴史』京都大学学術出版会、二〇〇七年、二二二—二五一頁 24.(28) レイナルド・C・イレート^{しゅっぱんかい に しちねん に に に にごんいちページ}「日本との戦争、アメリカとの戦争——友と敵をめぐるフィリピン史の政争」藤原帰一^{せんそう せんそう とも てき し せいそう ふじわらきいち}・永野善子^{ながのよしこ}(編著)『アメリカの影^{かげ}

1.(27)中野 聡『歴史経験としてのアメリカ帝国——米比関係史の群像』

岩波書店、二〇〇七年、二七五—三一五頁。2.(28) Agoncill

o, op. cit., pp. 448–449. 3.(29)中野、前掲書、三一七—三八六頁。4.(30) Ore

ndain, op. cit., pp. 87, 88, 125–129. 5.(31)リカルド・トロタ・ホセ「フィリピン

における戦争記念碑と記念式典——踏査的観察」リディア・N・ユー・ホセ(編著)/

佐竹眞明・小川玲子・堀芳枝(訳)『フィリピンと日本の戦後関係——歴史認識・

文化交流・国際結婚』明石書店、二〇一一年、三三一—六六頁。6.(32) Santo

s, op. cit., pp. vii–ix. 7.(33) Karganilla, op. cit.; Manalac, op. cit. 8.(34) Karga

nilla, op. cit., p. 218. 9.(35) Manalac, op. cit., p.26; Santos, op. cit., pp. 29–

31, 94–95, 147, 168. 10.(36)中野、前掲書、一五四—一五五頁。11.(37)木下

昭「日本語教育のトランスナショナル化——ダバオ日系社会の変遷と植民地主

義」蘭信三(編)『帝国以後の人の移動——ポストコロニアリズムとグローバリズムの

交錯点』勉誠出版、二〇一三年、八六七—九〇六頁。12.(38)説田長彦

「(資料)比島派遣日本語教育要員配置表」「さむばぎいた」第七集、一九九〇

年、一一—六頁。13.(39) Natural and Historical Foundation (Puerto Prince

sa City, Philippines), Puerto Princessa during the Second World War: a narr

ative history, 1941–1945, City of Puerto Princessa, Palawan: Natural and Hi

storical Foundation, Palawan Museum, 1998, pp. 27–28 and 31–

32. 14.(40) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C13071888200、アラバット

島警備隊陣中日誌(防衛省防衛研究所)。15.(41)数少ない例として、垣兵団

歩兵九連隊所属の上林吾郎は、ルソン島南部のナガ市で一九四二年一〇月頃

から翌年九月にかけて教務に就いた時のことを、勤務時に執筆した私信を交えた

短文で残している。彼は、ある程度英語が使えたようで、見よう見まねで教育に携わ

っていたようだ。上林吾郎「サンタイサベラ学院のころ」『吾等かく戦えり——

比島に於ける垣兵団』桃陵会、一九七一年、三五四—三五九頁。16.(42)フィリ

ピンと同様に日本語教育が行われたマラヤに関する研究によると、初期の「兵隊

先生」はわざと人民を威圧しようとして恐がらせる面があったが、後から来た文官

あるいは民間人の教員はそうではなく、比較的現地住民に好意的に迎えられ

たようだ。松永典子『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』風間書房、二〇〇二年、一四〇—一四八頁。17.(43)木下昭「占領地日本語教育はなぜ「正当化」されたのか——派遣教員が記憶するフィリピン統治」『東南アジア研究』五二巻二号、二〇一五年、1111六—二三七頁。18.(44) Pratt, op. cit., pp. 6–7. 19.(45) 皇睦夫『ルソン戦とフィリピン人——ルソンで日本軍は何を見たか』楽游書房、一九八一年、一八三頁。20.(46)佐竹久『髭髯たるルソン戦線——若き憲兵の従軍記録』三崎書房、一九七三年、七七一七八頁。21.(47)福原治夫「四十年振りの再会とユウカン」『さむばぎいた』第六集、一九八九年、五二頁。22.(48) Bureau of the Census and Statistics, Statistical abstracts, Manila: Bureau of Print, 1942, pp. 33–35. 23.(49) Molina, Antonio M., *Dusk and dawn in the Philippines: memoirs of a living witness of World War II*, Quezon City: New Day Pub, 1996, p. 143. 24.(50) Karganilla, op. cit., pp. 248–254; Manalac, op. cit., pp. 28–53; Santos, op. cit., pp. 69–70, 71.

占領下日本語教育はフィリピンでいかに記憶されたか

(52) Karganilla, op. cit., p. 249

(53) Santos, op. cit., p. 71.

(54) 例えば、日本占領期に再開された高校で日本語を担当した日本人が、軍人か民間人かわからないという語りがある。Karganilla, op. cit., p. 201. またサントスの著作で取り上げられた語りのなかに、フィリピン人に心を寄せた日本人の例として、将軍の息子で英語の教育を受けた「マサキ」を挙げているものがある。彼は軍人とされているが民間人で、真崎甚三郎陸軍大將の次男のことであると思われる。彼は日本語教師として派遣され、現地では主に通訳をしていた。Santos, op. cit., p. 80.

(55) 当時の軍政監部総務課長は、英語が敵性語となって仕事を失った教員の存在を念頭に、彼らにフィリピンの小学校での英語による日本語教育を担わせることにした、と述べている[読売新聞一九六九年一月七日]。

(56) 山田秀吉「〈資料〉比島派遣教育要員の調査」『さむばぎいた』第四集、一九八七年、一二九頁。

(57) フィリピンの人達に、日本の軍人も「人間だ」と思わせた他の事象は、彼らが見せた家族に対する思いであった。Manalac, op. cit., p. 30; Santos, op. cit., p. 71.

(58) 綱島千代子「フィリピンでのことども」『さむばぎいた』第八集、一九九一年、五五―五八頁。